一

問1

a焦　b.嘆（歎）　c.そうぐう　d.と　e.必須

問2

形容詞は、誰にでも理解されやすい言葉ではあるが、さまざまな感情の個別性を切り捨てて、その形容詞の表す一般的ないずれの感情についてもあてはまるようなものにしてしまうものであるということ。

問3

わずか三十一文字という短い詩形で作者の思いを汲み取るには、ある程度の読みの訓練が必要であるが、初心者の場合それができていないことが多く、自分が他者の短歌に対して読めないのであれば、自分の短歌についても人は分かってくれないだろうと考えて、短歌を制作する際に説明過多になってしまうため。

問4

母は私が三歳のときに亡くなってはいるが、母の顔の記憶のない私にとって母は最初から存在しなかったも同じであり、その後の五十年の人生を、私は、存在しない母ということを強く意識しながら、その存在と共に、生きつづけたということ。

問5

言いたいことを、その前で止めておき、抑えておいて、相手に感じ取ってもらうということは、短歌制作のことだけではなく、人に接するときに自分がどのように感情を表現するかということに関する慎みでもあり、また他者の気持ちの表現もそのようなものとして理解しようとすることが、大切になるということ。

二

問6　①　現実に見てしまったことのつらさよ、と思って　②せめて一言だけでも言ってやろう。

問7　③　意志の助動詞「む」の已然形　⑤過去推量の助動詞「けむ」の連体形　⑧完了の助動詞「ぬ」の終止形

問8　庭の桜の花がはっきりと散っていく様を見届けようと思って参りましたと言って、暗に眼前の散る桜を二人の仲が終わることに喩えている。　※男の受け答えの表面的な意味が取れていれば可。

問9　身分の高い男が帰っていくのを私はこの目で見てしまったのだから、あれこれ弁解はいらない、と言おうとしている。

問10　身分の高い男が通って来るという風が吹かなかったら桜も散らず、私も心をうつすことはしなかったということを言おうとしている。

三

問11　a「たへ（え）ず」、b「また」、c「すなは（わ）ち」

問12　簡レ装ビテ将ニ行カント、以テ橘ノ重ナルヲ一、謀ルレ棄テンコトヲ之ヲ。

問13　（書き下し文）た（だ）いりきのもののためにこれをおひてさられんことをおそれ、
（現代語訳）　力持ちの者によって、その木が背負われ、持ち去られることを心配して、

問14　十数年ぶりに興化県に戻ってみると、橘の木が大きく成長し、たくさんの実をつけていたことに驚いたが、それだけでなく、昔からその土地にいる下役人によると、自分たち（劉公の家族）がこの土地を離れてからは橘の木は実をつけず、今年はじめて実ったということを聞き、不思議に思った。

問15　荘氏が興化県の知事となってから4年目、橘の木はすっかり衰弱してしまい、少しも花が咲かなかった。

問16　「任」